

SGH 東北復興防災研修を実施しました

第4回 SGH 東北復興防災研修が、高校2・3年 GL コースから選抜された生徒11名の参加のもと、12月21日(木)～24日(日)に実施されました。本研修は、本校 SGH の研究開発課題の主軸となる「災害の防止・対策を考える」ために行われています。東日本大震災の被災地を訪れ、様々な方からのお話を伺い、同世代の高校生との交流を行うことで、今後のよりよい世界をつくるために自分たちができることを考え、次代を担う若者を育成することが目的です。昨年度は宮城県内を中心とした津波被害に焦点を当てた研修であったため、本年度の原子力発電所の事故とその影響に焦点を当てた研修にも連続して参加を希望する生徒もおり、問題意識を高く持った生徒たちが集まりました。

本年度の研修は福島第一原発周辺の広野町、楡葉町、富岡町、双葉町、浪江町、南相馬市、および、福島市、二本松市、郡山市で行い、福島県立ふたば未来学園高等学校や同県立福島高等学校の生徒との交流も行いました。

1日目

京都から新幹線で品川駅まで行き、常磐線特急「ひたち」に乗り換えいわき駅まで移動、そこからバスで楡葉町「木戸の交民家」を訪問(研修1)しました。

研修1 楡葉町にある「木戸の交民家」訪問

この施設は、楡葉町にある被災家屋が解体されている中で、築70年の古民家を再生し、この地域で暮らす方、働く方、支援者として関わる方等の地域コミュニティー交流拠点とする取り組みが行われています。ここを訪ね、ここの活動に関わる方からお話を聴きました。木戸の交民家から海側は、見通しよく整地されていて、その一角にぽつんとこの家が建っていました。その目前に、除染で集められた土などが入ったフレコンバックが仮置きされていて、これが本研修の最初に目の当たりにする現実でした。ようやく、減容化施設や中間貯蔵施設が整備され、これらの数が減ってきたそうです。その数が減っていくことが、復興の象徴になると言う方もおられるようです。



ここでは、一般社団法人 AFW 代表理事の吉川彰浩様にお話を伺いました。吉川様は震災当時、福島第二原発に東京電力の技術者として勤めておられた方です。最初は原発で働いている方へのあまりにも行きすぎたバッシングや心理的に分断される地域に心を痛み、正しく原発の中の現状を伝えたい、自分の働く場所が地域を壊してしまったから何とかしたい、という思いでこの活動を決心されたそうです。

17m を超える高さ、電柱の 1.5 倍の高さの津波が原発をおそった後、第一原発だけでなく第二原発でも電源が喪失しており、それを復旧させるためにぎりぎりの作業が続いたそうです。しかし、第一原発では努力も実らず水素爆発が起きました。そのとき、社員の方は日本はなくなるかもしれないと思うと同時に、1 秒でも早く放射能を封じ込めるため全力を注いでおられたそうです。血だらけの知人が運ばれてきたのを見たりするなかで、生まれて初めて遺書を書いたともお聞きました。津波で亡くなった人、爆発で怪我した人。呆然として受け止めきれずに、自分も死ぬかもしれないと本当に思ったとおっしゃっておられました。

第一原発から 20k 圏内は「1 日くらい離れてください」「とにかく離れてください」との指示で避難し、体育館にすし詰め状態になった人々、生理中の女の子が何も持っておらずに血だらけになっていた様子などを目の当たりにし、ふるさとと人生への喪失感をつのらせていったことなど、生々しい状況をお聴きしました。

原発に関わる人が多く暮らす町であるがゆえに、人々の心の分断、加害者と被害者という意識など、我々が考えている以上に複雑な感情があることを知りました。浪江町では 2017 年 3 月 31 日に帰還困難地域を除く半分ほどの地域で避難解除されましたが、6 年経って「戻っていいよ」と言われても、簡単には戻れないと言います。たとえば、避難先で生まれた子どもたちはそこに生活のベースができていますからです。

最近では、福島第一原発と隣り合っただけで暮らすとはどういうことだろう、当たり前で暮らせて次世代につなげられるふるさとや、安心安全で納得感のある廃炉とはどういう形だろう、ということを常に考えておられると言います。原子力に関わる職場は専門的すぎる場なので、暮らしのある地域とわかりやすくつなぐ役割をしたいとも述べられていました。そのなかで、緑の絨毯を復活させるべく米作りを行うなど、地域を元気にする取り組みを「木戸の交民家」中心に開始されているとのこと。今年穫れた思いのこもったお米を私たちは喜んでいただきました。

その後、廃炉とはどういう定義か、飛散防止剤の能力はどれほどか、問題になっている汚染水とは、現在の放射能の状況など、原発事故後に関わる話題をわかりやすく解説いただきました。また、みんながわざわざ働きたいと思わない事故を起こした原発で働く人がいます。冷静に考えれば、現在は安全とはいえ、頑張っていることが評価されない。精神的に病む人が増え、頑張っても非難される職場。不安で、生きていて良いのかという思い。居



場所が感じられない中、家族をどう守るのか悩んだといいます。そして、先の世代にどう伝えるのか。本当のこちら（原発）側を伝えたかったとの思いもお聴きました。

その後生徒たちは、夜の振り返りミーティングで想いを共有しました。現地に赴いてこそ見聞きできた内容に大きな衝撃を受けると共に、ふるさとを「復興ではなく創成する」という言葉が印象に残ったようでした。

2日目

まず、天神岬展望台から昨日訪れた木戸地区、防潮堤の建設工事、洋上風力発電機の様子などを視察しました。海の見えなくなる復興で良いのかという論議があったことが記憶に新しいものです。福島県は再生可能エネルギーで100%電力をまかなう目標を設定しており、広大な太陽光発電施設もいたる所で見られました。

バスで国道6号線を北上し、帰還困難区域と解除された区域が道一本隔てて隣接する富岡町夜ノ森南地区を視察しました。どこかで帰還困難区域の線を引かなければいけないのはわかりませんが、その線がひかれた道路に立つ時、住民の方々の複雑な思いに少し触れたように思いました。その後、昨年復旧したばかりの富岡駅を訪れた後、東京電力旧エネルギー館（研修2）、ふたば未来学園高等学校（研修3）での研修・交流を行いました。



浪江町の東日本大震災慰霊碑、児童全員が助かった請戸小学校を視察しました。慰霊碑のある高台から小学校を見ると、高台までの道のりは予想以上に長く、励まし合いながらの避難がいかに大変だったか、津波に集落が呑み込まれるときに、高台からどんな気持ちで児童達がそれを見ていたのか、想像すると心が痛みます。1階部分が大きく破壊された小学校を見れば、津波の威力がわかります。



その後、常磐線の北側の開通区間の起点である浪江駅を訪れたのち、南相馬市小高駅前の双葉屋旅館に宿泊しました。この旅館では、女将さんから震災当時から現在までのお話を伺う機会（研修4）を得ました。

研修2 東京電力旧エネルギー館訪問

エネルギー館は、東京電力のPR施設として昭和63年から運用されていた施設です。震災後は、福島第一原発を視察に訪れる人の拠点として利用されており、今回はこの施設で、廃炉の進捗状況や東京電力福島復興本社の取り組みについて、福島復興本社 部長の廣川克典様、副部長 大久保智様、福島広報部 兼 復興推進室の高橋邦明様にお聴きました。



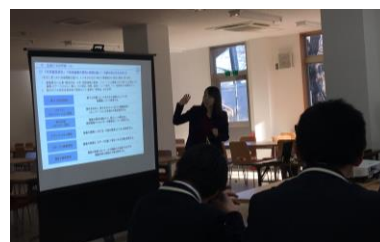
その説明は、私たちの予想を超えた丁寧さで、「事故の責任を全うする」ことを最優先に、

地域のニーズに対応できるように努力しておられる様子や、廃炉と復興を両輪として推進していること、福島第一原子力発電所 1 号機から 4 号機までの現状と今後の見込み、事故後の放射線量の変化や汚染水等の問題など、幅広い内容をわかりやすく説明いただきました。



研修 3 福島県立ふたば未来学園高等学校の生徒たちとの交流

震災前双葉郡に 5 校あった県立高校は、県内外各地に設けたサテライト校で授業を続けていましたが、元の校舎での授業再開のめどが立たず、平成 27 年度からの募集を停止しました。そこで、教育復興をめざし、広野町に平成 27 年 4 月中高一貫のふたば未来学園が設置され、現在に至ります。同校は、SGH 校として「未来創造型教育」を行っています。NPO 法人カタリバさんが「双葉みらいラボ」を設置し、同校の支援も行っています。ふたば未来学園高等学校の先生方、そして昨年度もお世話になりましたカタリバさんにもお世話になり、スタッフを交えて、ふたば未来学園の生徒たちと交流しました。



本校の SGH の取り組みである防災を中心とした活動の紹介、ふたば未来学園の SGH の取り組みの情報交換のほか、事前に本校から提出していた質問に答えてもらう形式で交流が行われました。ふたば未来学園の生徒さんたちが放射能の問題や原発事故に真正面から向き合い、問題を解決すべく、調査・研究し、様々な活動をされていることに本校の生徒たちは大きな刺激を受けたようでした。

また、周囲から受けた、無知であるがゆえの誤解からくる拒絶等の話には衝撃を受けました。しかし、前向きに今後を考える生徒たちに、本校生徒たちは大いに触発されたようでした。

研修 4 南相馬市双葉屋旅館

双葉屋旅館は、原発事故から 5 年 4 ヶ月もの間避難指示が出されていた場所にあります。同旅館は再開のためにボランティアさんを募集して以来、多くのボランティアさんが集まる場所になり、復興の一拠点になっています。女将である小林友子様から当時の状況や現在に至るまでの活動をお聞きしました。その概要は以下の通りです。



津波の時、常磐線まで人が流されてきました。瓦礫は常磐線の線路で止まりました。しかし、水路を通してこちら側の小高区にも水が入り、床上

まで浸水しました。停電のためテレビからの情報を得られず、唯一のニュースソースはラジオのみだったといいます。3月12日に原発から20キロ以内に避難指示がでましたが、深刻に考えていませんでした。ところが、原発の仕事をしている人から直接聞く情報が早く、段々と不安になってきました。ついに、14日に3号機が爆発し、15日から突然の避難生活が始まることになりました。

1年後の4月16日に、一時立ち入りが可能となりました。2012年末、助成金を使い、旅館改修と再開を決心しました。改修には2013年8月から2年かかりました。当時は廃材を移動させることができず、作業はなかなか進みません。

先人に学ぶというつもりでチェルノブイリにも3回訪れました。そこで、原発事故後のことを学び、そこから生きるヒントを得て復興に活かそうとしてきました。菜種はセシウムを吸収するけれど、菜種油には含まれないので、チェルノブイリでも最初の農作物として利用されていたようです。作物のない畑に緑の作物が栽培されることは希望の火をともしることになりました。そこで、菜種栽培を広げ、菜種油「油菜ちゃん」が製品化されました。

2016年7月12日に一部避難が解除されましたが、まだ南相馬市の人口は震災前の2割にも満たないようです。「それでも、何もかもが無くなったところに、2000人以上が住んでいる事がすごい」「夢を諦めずに」行動する、とおっしゃる言葉が印象的でした。

3日目

福島市内にある果樹農家まるせい果樹園さんを訪問（研修5）し、原発事故後に大幅に売り上げを落とし、その後現在に至るまでのご苦労と取り組みをお聴きしました。午後は、福島県立福島高校の生徒との交流（研修6）、二本松市にある福島県男女共生センター（研修7）にて震災後の取り組みを伺いました。

研修5 果樹農家の訪問

福島市にあるまるせい果樹園は、もともとは桑の栽培をしていて、70年前から果樹栽培を行うようになり、今では、東京ドーム2個分の栽培面積を持ちます。以下は、代表の佐藤清一様のお話です。

原発事故後、売り上げが一時期前年の10%にまで落ちました。放射能の検査を実施し、安全である自信はありました。しかし、待っているだけではお客さんは来てくれませんでした。廃業するかどうかを本当に悩んだそうです。そのような時、支援してくれる方々のおかげで30カ所くらいに出張販売に出かけました。その中で、いくら自分で「安全ですよ」といっても説得力にかけてしまうと感じたので、客観的な安全基準の認証を受けようと決心しました。それがJGAPという厳しい農場管理の基準です。120を



超えるチェック項目が有り、それを満たすために農薬管理、肥料の管理、環境保全や食の安全性についてすべてを見直しました。そのような活動をしている中で、震災前はほとんどなく物作りをしていたのではないかと思うようになりました。よりよい品質のものを作ることでお客様が笑顔になってもらえるようにがんばっています。お陰様で、ようやく震災前の売り上げになりました。

震災前以上の品質のものを作ることで、みんなを笑顔にし、福島を発信していきたいという佐藤清一様のお話がとても印象的でした。

研修6 福島県立福島高等学校生徒との交流

福島高校はSSH校として、本校との交流がある学校です。まず、それぞれの取り組みの紹介がありました。福島高校の生徒さんたちは、震災の後、何ができるか考え、様々なプロジェクトや研究を行ってきたようです。しっかりと調査・研究、そして事業を起こす一歩手前のものであり、同じ高校生の活動に本校の生徒はかなり驚き、刺激を受けていました。



後半部分では、グループで震災後の避難所運営や防災について考えました。例えば、避難所に届く食品の数が避難者の数に足りない場合の対応の苦悩など、現場を経験した方であればわからない視点も多く得、生徒たちも「みんなだったらどうする？」と問われ、しっかりと考え、話し合っていました。

災害はいつかどこかで必ず起こるものであり、それに備える活動を風化させてはいけないということを改めて意識しました。福島高校側からも、震災について語ったり触れたりする機会が減ってきているため、今日の機会で新たな視点が持てたとのことでした。

研修7 福島県男女共生センター

二本松市にある福島県男女共生センターでは、事業課 主査の岡部貴敏様にお話を伺いました。震災時は、まず病院の入院患者の避難先となり、その後放射能のスクリーニング会場、浪江町役場の機能など様々な役割を建物が担うと共に、男女共同参画センターの役割から避難所における女性のケアの取り組みなどをお話いただきました。



特に、避難所において、女性の着替える場所がない、男性の目が気になるなどという声から、女性の安心安全を守り、女性同士の交流の場の提供のために、避難所内におそらく日本で初めての女性専用スペースを設置、郡山市の女性団体の協力を得て運営を開始したそうです。女性や高齢者、障がい者、セクシャルマイノリティの方、外国人など、性別や多様性に配慮しながら、避難所における安心安全を確保することの重要性に気づかされました。

4 日目

この日は二本松市から郡山市に移動し、「富岡町 3.11 を語る会」を訪問（研修 8）し、現在も避難されていらっしゃる方々のお気持ちを伺いました。その後、郡山駅周辺のフィールドワークをし、新幹線で京都に向かいました。

研修 8 富岡町 3.11 を語る会

ここでは、多大な被害を受けた富岡町の現状と課題を、全国の避難している人や関心を持つ人に対して広く語り伝える事業を行っています。当日は、語り人（かたりべ）の仲山弘子様、坂本孝子様にお話をお伺いしました。

富岡町では震災前の人口の 2% 足らずしか帰還できていません。東電関係者だった方、行政に関わる方、農業や商売をしている方とは違った、避難されていらっしゃる方々の視点をここで得られたのではないかと思います。富岡町、原発事故に対するお気持ち、富岡町に帰りたけれど帰れない現実、原発事故や避難に対するお気持ち、家族がバラバラになってしまい、もう 2 度と一緒に住めない寂しいお気持ちなど、避難されていらっしゃる方々の思いをお伺いしました。

広大な太陽光発電施設は、多くは田園であった所に設置されています。「木戸の交民家」でのお話にもあったように、実は、田んぼでイネが栽培されている普通の風景こそが、望んでいる姿であり、田んぼであった場所にソーラーパネルが並んでいても、復興を感じることができないという言葉が印象に残っています。

語ることができるようになるまでの苦悩、語ることで広がるネットワークなど、その活動自体が「語り人」の精神的支えになっているとのことでした。



研修 9 FUKUSHIMART の取り組み

FUKUSHIMART は震災後に風評被害を受けた福島県の農産物に商品としての付加価値をつけて販売する取り組みをしている所です。まるせい果樹園の佐藤清一様にお聞きした話につながるものでした。加工せずに農産物そのまま市場に出していたら市場が価格を決めるため、福島県産は安くでしか売れません。よりよい品質の作物を作り、それを加工し、商品としての付加価値をつけることで、自ら価格を決めることができます。それをお客さんに買ってもらえるか実験をしている場所といえるかもしれません。ここには、アイデアが詰まった商品がたくさんあり、生徒たちも応援したい気持ちでいっぱいになったようでした。



今回の研修によって、生徒たちは一口に復興といっても立場によって考え方が様々であることがわかりました。生の声を聞き、今の福島を感じ、微力ながらもこれからも関わり続けたいと思ったようでした。さらに、自分たちが被災したらどうなるかも考える良い機会となりました。研修後も事後学習を続けており、自分たちに何ができるかを真剣に考えています。

本研修にご協力いただいた皆様に、この場を借りてお礼申し上げます。

最後になりましたが、本研修の行程を組み、それぞれの研修先の方々に連絡を取り、調整してくださいました公益財団法人 福島県観光物産交流協会の支倉文江様には本当にお世話になりました。ありがとうございました。